共同研究　日本常民文化研究所所蔵資料からみる フィールド・サイエンスの史的展開

アチックミューゼアムおよび民族学振興会の調査資料の有効活用にむけて

泉水　英計

所員を中心とした共同研究として本年度より標題のプロジェクトが開始された。国際常民文化研究機構の第１期共同研究プロジェクト「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と同「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」のなかで学史への関心が深められ、また、常民研が所蔵するアチックミューゼアムの非文字資料および民族学振興会運営資料が整理されて比較的円滑に利用できるようになった。これらを更に前進させることが本共同研究の目的である。

初年度の活動はその方向性を探ることに重点を置き、２回の研究会と２回の現地調査をおこなった。第１回研究会（７月４日）には国立民族学博物館より飯田卓氏を招き、同氏による「日本民族学協会の共同事業――博物館とエクスペディション」という研究発表と、同館で推進中の展示プロ

写真１　チェンマイ郊外での面談調査

ジェクトの紹介があった。最初の現地調査は1月初旬に岩手県八幡平に赴き、有賀喜左衛門『大家族制度と名護制度』（アチックミューゼアム彙報43）に関する調査をおこなった。石神齋藤家調査当時のアチックフィルムを持参して上映し、現当主から追加情報を得たほか、齋藤家所有の未公開書類を閲覧した。その際に、後者については近年東北の研究グループが本格的な研究をすすめていることが判明した。そこで第2回研究会（2月28日）はこの研究グループを神奈川大学に招き、公開研究会「日本農村社会学の始点――石神齋藤家と有賀喜左衛門」を開催した。具体的には、三須田善暢氏（岩手県立大学）による「石神調査と有賀喜左衛門、および関係する人物」、林雅秀氏（山形大学）による「石神齋藤家における漆器生産」、長谷部弘氏（東北大学）による「経済史からみた有賀石神村研究の意味」である。

いまひとつの現地調査は、3月上旬にタイ国チェンマイに赴いて、1950年代に民族学協会が組織した東南アジア稲作民族文化綜合調査団に関する情報集取をおこなった。ここでも、対象となる過去の調査活動のなかで撮影された画像資料を当該の調査地に持参することで現住者の記憶をスムーズに引き出し、多くの追加情報を獲得することができた。

今年度の活動から浮かびあがった方向性に沿って追加情報の収集と関連新資料の探索を継続しつつ、常民研所蔵資料を足がかりにして、民俗学・文化人類学の史的展開を跡づける他の有望な追跡調査の対象の検討もすすめていきたい。

写真２　八幡平市博物館にて齋藤家資料の調査

写真３　チェンマイ郊外のメージョー大学

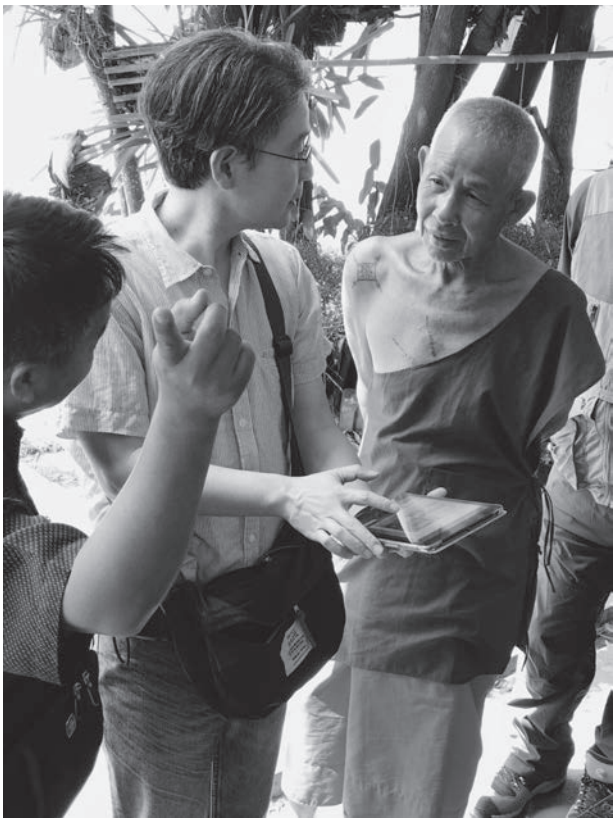

写真４　東南アジア稲作文化綜合調査の調査村での情報収集